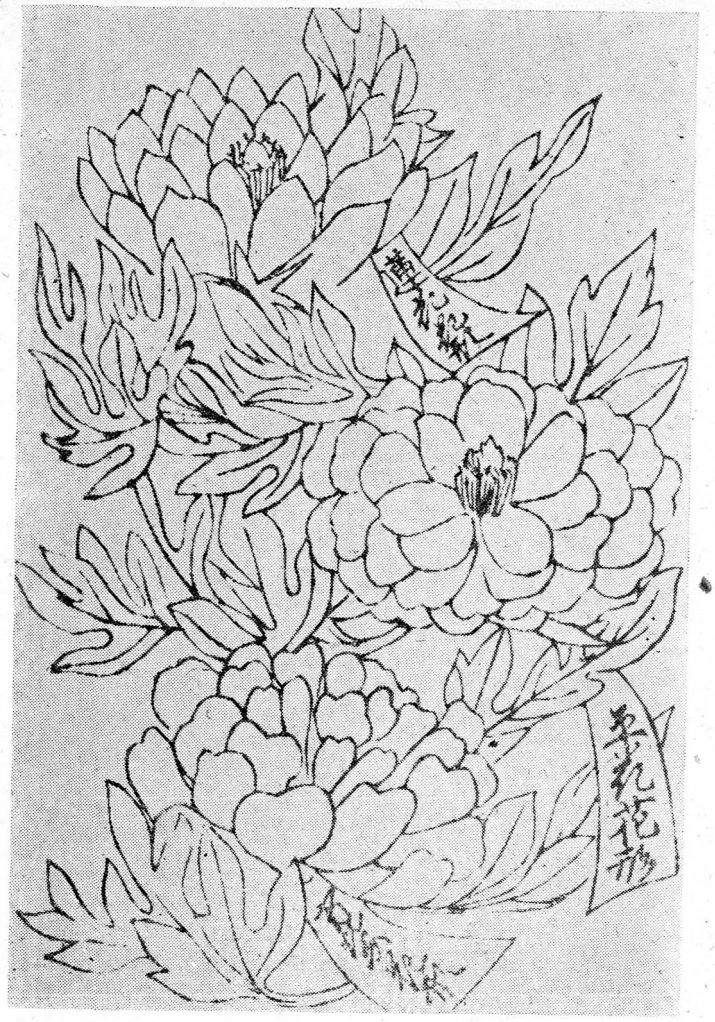
ぼたん（牡丹）について

明道　博

ぼたんはしやくやく（芍薬）と同じ属であるが木本であるために今日では種が別になつている。純然たる東洋花卉の一つで原種は殆んど支那大陸に限られ、中国の西北部から雲南省にかけて山岳地帯に分布している。そしてそれの栽培が最高潮に達したのは唐、宋代と言われ、彼の「洛陽牡丹記」を著した宋の欧陽修をして「天下真花独牡丹而已」と断ぜしめるに至つた。彼の「洛陽牡丹記」には既に三一種を記載しており、花王・洛陽花・富貴花等という名が別名としてこの花に与えられて、遂には支那の国花として認められていた（現在は廃止になつている）ことからも如何にこの花が愛翫されたかがわかる。

本邦にこの牡丹が輸入されたのは今から略一、〇〇〇年前とされている。最初はほうたんと記されていたが、その後ふかみぐさ（海草）ぼうたん・はつかぐさ・やまたちばな・なとりぐさなどとも呼ばれて来た。本邦で牡丹の栽培がいよいよ盛んとなり、また今日種々の記録を求め得るのは徳川時代に入つてからであつて、伊藤伊兵衛の著「花壇地錦抄」（西暦一六九四年）や「増補花壇地錦抄」（一七一〇年）には数百品種を挙げ、品定めの法や花形の別（一図）色彩、開花期などを記載しているし、またこのころには既に寒牡丹の存在、牡丹の実生法等が知られ、品種の数も急激に増加していたようである。元録の華やかな風俗と、艶麗な牡丹の全盛とはわれわれの想像によい調和となつて響いて来る。



第1図　「増補地錦抄」に掲載されている牡丹の花形の図

明治に入ると牡丹苗の生産も他の作物と同様に産業的な進展が見られ、生産苗は商品として販売されるようになり、その比較的まとまつた産地としては大阪府池田市附近、新潟県小合附近等が登場して来た。これら産地から一時牡丹苗の海外輸出が行われたが、その後中絶した。

欧州に中国から牡丹が渡つたのは十八世紀末、イギリスへ入つたのが初めてといわれ、これから各国に普及した。二〇数年前にフランスで黄色花種が作出され、その数種が本邦へ入つて「金鵄」「金晃」「金閣」「金陽」の名で知られている。しかし中国には昔から黄色種があつたと言われる。

前述のように牡丹は中国の寒い地方あるいは山岳地帯に産するもので、栽培も暖い地方では発育がよくないが本邦では関西、北陸、関東、東北、北海道等でよく育つ。とくにこれらの中でも北部では枝枯病、銹病、白紋羽病等の発生が比較的少なく栽培には楽である、と言える。寒気に対しては比較的強く、北海道の北見、東北の福島県須賀川には古くから大きな牡丹園がありよく知られていたし、新潟の牡丹苗生産は戦後再び活気づいて来ている。

繁殖

牡丹を繁殖するには株分け、接木によるのが一般であつて、場合によつては実生（いわゆる生木牡丹）挿木を行うことがある。

株分法は秋九月下旬に親木の根元を掘りここから発生する蘖（ヒコバエ）を根を附けて分離し、これを育成する。

接木法は最も普通試みられる繁殖法でこれに共砧接ぎと芍薬砧接ぎの二法がある。いずれにしても接木をするには砧木を養成することが必要である。

共砧接ぎの場合の砧は砧牡丹という、紫色八重咲の牡丹が適している。これは生育も旺盛な種類であつて、株分け法によつて養成しておき親指の太さのものを砧とする。これには株分け後二～三年間肥培しなければならない。この肥培期間中は小枝を掻き取つて出させないようにし、主枝一本だけを太らせる。砧は九月初め掘り上げ、一時仮植しておき、九月中旬に取り出して幹を二寸位に切りこれに切接ぎをするのである。

接ぎ穂は通常一芽をもつて切取り、砧と穂の形成層が合うよう接ぎ合せ打葉やラフィヤで緊束し、その接合部の上を油紙で包むか、ラノリンなどを塗つて水が接口に入らないようにする。

接ぎ終つたものは一旦仮植する。この場合、土を盛つて穂が隠れる位にする。これが活着したかどうかは大略三週間後になつて穂の芽の活気で判断できる。接いだ苗の越冬は穂の上に五寸素焼鉢を逆さに伏せ、底穴から砂を入れて穂が隠れる位にし、後底穴の上に瓦をのせて雨水の侵入を防ぐ。春になつて雪が消えてから鉢を取り去つてやればよい。秋になつてから一尺五寸位の間隔に定植してやる。この接木法は古く徳川時代には既に行われていた。芍薬砧に比し活着率がよく、樹の生育も勝るが反面砧芽の発生があるのが欠点で、これは土を掘つていつて砧芽の根元から切り去つてやる必要がある。

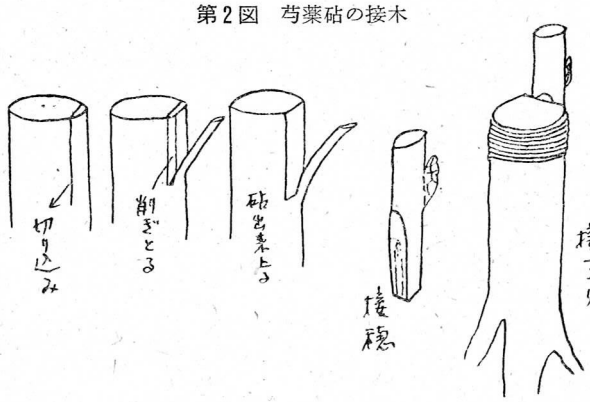
一方芍薬砧による接木は明治の後期から始められたもので、フランスで試みられていたのに倣つて本邦でも行うようになつたものである。芍薬の砧木として用うるものは親株を掘り起しその根を採つてこれを砧として接ぐ場合と、実生して得た根頸に接ぐ場合とあるが後者の方が斉一な砧を多数得るに適している。それには成熟した種子を採つて直ちに床に播きつけ藁を被うておけば翌春発芽して来るから十分肥培し、九月に掘り上げて主根の尖を三分の一位切り去り畦間一尺五寸、株間五寸位に植付け、更に肥培を続ければ翌年の九月には砧木として用いられる。

共砧に比し活着率は劣るし、生育もわるいが、倭性であり、根群が小さく、砧芽を生ずること少ないから、鉢植、花壇植、促成切花用等に却つて喜ばれる。また地下水位の高いところとか、粘質地では共砧より生育がよい。

接ぎ方は揚接ぎが主で、第二図の如き切接ぎをする。穂は接ぐ直前に採取すればよい。葉が未だ着いているから、葉柄を残して除き、穂には健全な芽一箇をつければよい。接ぎ終つた苗の管理は共砧の場合と同様でよい。

以上いずれの場合も接木の適期は九月中旬であつて。用うる穂は本年発生のもので鉛筆太のものを用いる。ただ寒牡丹は早目に接いだ方がよい。

第2図　芍薬砧の接木



栽培

植付　牡丹の植込みは九月下旬から十月上旬を適期とする。栽培距離は二～三尺方形植でよいが、樹が大きくなつて来たならば間引いて更に拡めることになる。植込みに際しては植穴を掘り、底部に基肥として腐熟堆肥、粕類を入れる。その上に土を若干入れ、その上に植込む、植え了つたなら十分に灌水する。植込みの深さは接口が僅に土中に埋る程度とする。植付けの適当な場所としては風当り少なく、日光が十分に当り、掛水よくかつ夏期発育期に乾燥が著しくないところがよい。

植付け後の施肥の時期は大体年三回となる。即ち、秋、早春、開花直後であつて、春晩く開花期に近づいてから施肥するのはよくない。この三回の中でも秋（十月中下旬）の施肥に主力を注ぎ、三〇坪に堆肥三〇貫、油粕二貫、大豆粕二貫、木灰三貫、追肥（春開花後）として下肥二〇貫、過燐酸石灰一貫、油粕一貫程度が標準である。

冬囲い　植付け後冬を迎えることになるが、前述のように牡丹は寒さには強いものであるが、積雪地帯では雪で枝を傷めるものであるから、冬囲いをしてやる必要がある。この冬囲いは従つて防寒というよりは雪で折れないようにすればよい。

その他の注意事項　春になつて開花期が来たならば、小面積であつたならば防風、防雨の設備をしてやれば花保ちはよい。また花が凋んだならば必ず花梗を切り捨て結実せしめないことが樹を弱らせないために必要である。

昔からよく牡丹は金気を嫌うと言われ、除草や中耕に際し一切鍬を用うべきでないと言う人があるが、牡丹は大体根を切断されることを忌むし、体内にタンニンを含むから鉄気を嫌うことは確であるから、株分けや、追肥に当つては鉄の刃物で分けたり、深く鍬で株際に鋤き込まぬ注意が必要であるが、その他一般の中耕、除草は差支えない。

寒牡丹は普通の春牡丹と異つて元来二季咲きの性質を有しているが、寒咲をとするには春咲きの蕾みは取り去つて咲かせない。霜に数回遭せた後に移植して温室へ搬入し一五～一八度（c）位に加温すれば寒中に開花する。なお八月に葉を全部摘除して強制的に休眠に入らせると、花蕾の萌出が早まる。

次に**牡丹の鉢栽培**は素焼の一尺～一尺二、三寸の物を用い、用土は肥沃でやや埴

質のものを用うる。苗は芍薬砧のものがよく、九月下旬、掘り上げ数時間日光に直射せしめると根が柔かとなり植え易くなるから、これを鉢に植込む、十分灌水してやる。鉢ごと畑土に活け込めば灌水の手数が省ける。鉢植は毎年九月下旬に植え替え、根を整理して培養土を取替えてやる。

品種

戦前は数百品種が売り出されていたが、戦時中に大部減じてしまった。また名称が不明になってしまったものもあり、それらはその後次第に名称の調査が進んで来ている。

新潟県花卉球根協会が以前に選定した奨励品種を挙げると

「白色系の部」扶桑花、翁獅子、白幡龍、水昌白、雪月花、玉簾、五大州、雪笹、比良雪、月世界

「淡紅色系の部」桜獅子、酔顔、玉芙蓉、八重桜、九十九獅子、御所桜、八千代獅子、養神、八千代椿、長楽、蓬莱山

「純紅色系の部」大正紅、日之出世界、旭光、豊代、浮獅子、麒麟司、旭の空、嵐山、岩戸鏡、明石獅子、初日之出、錦之艶、大内姫、今猩々、七福神

「濃紅色系之部」神楽獅子、新神楽、濃神楽、緋扇

「黒色系の部」崑崙獅子　初鳥

「紫色系の部」熊谷、花大臣、藤染衣、麟鳳、瑠璃盤、錦島

「底紅色の部」春の曙、雪燈籠

なお切花用としての適品種を挙げれば、

（関氏著　花弁園芸精説より）

○「春牡丹」新阿房宮（濃紅、八重）、白幡龍（白、千重）、富士の峰（白、千重）、新神楽（濃紅、万重）、黒龍錦（黒、紫白絞、一重）、燭光錦（本紅白絞、一重）、西行桜（桜色、一重）、月宮殿（白、万重）、雪燈籠（白、底紅、一重）、綴水錦（濃紅、淡紅絞、八重）

○「寒牡丹」秋冬紅（本紅、八重）、上天紅（緋、八重）、千代錦（本紅白絞、八重）、雪重（純白、八重）、寒桜（淡紅、一重）、緋司（緋、一重）

病害

牡丹を冒す病害の主なものは、開花前に出て葉、枝、蕾を冒すボトリチス、開花前後に出る銹病、根に白い菌糸がからみつく白紋羽病などがあり、これらは発病部は直ちに除去しなければならない。また冬季石灰硫黄合剤一〇倍位のものを、発芽前に二斗式ボルドウ、開花後四斗式ボルドウ液を撒布してやると同時になるべく日当りをよくしてやる。

更に樹全体が萎縮するかあるいは軽いものでは葉が萎縮して来る場合がある。かかるものは抜きとつて株を更新するより他ない。

観賞・効用

牡丹は漢方医に薬効が認められ、室町時代から江戸時代に亘つて盛に用いられた記録がある。その効能書によれば「牡丹の根皮を煎じてその汁を飲用すれば頭痛、神経痛、腰痛等を去り、傷口に用うれば止血薬となり、あるいは月経不順、産前産後の諸患に対しても卓効がある」というのである。

また牡丹の花弁は頗る美味であると言われる。花弁は散り易いもので、これを拾い集め清水でよく洗滌し、陰乾し後砂糖漬あるいは砂糖湯で煮て食する。ただ前記薬効もあるところから考えて大量に食するのは考えものである。

次に**牡丹の水揚げ法**として知られている二、三を記して見よう。

一　切口の樹皮を一寸位の間剝ぎとる。

二　水中で切返しを行う。

三　切口一寸位を燃焼して炭化せしめる。

四　濃塩酸に一分間位切口を漬け、後直ちによく水洗いする。

五　花器中の水に少量の蜂蜜を入れてやる。

以上のような水揚げの処理をしないと、牡丹はすぐ凋れてしまう。

牡丹は花王といわれ、富貴花と言われるだけ格式の高い花と考えられているから、御祝などの席には好んで生けられ、上位におかれるが、ただ婚礼の時には忌まれる。これは薬草である関係からである。

生け方は自然風なのが最も普通であるがただ、花を全体の上位に置くと花が豊大なために下垂したり、そうでなくとも不安定の感をまぬがれ得ないものであつて、従つて開花の枝は下部に体として生け、蕾を以て真、添とするのが普通である。そして開花一輪、蕾一～二輪が生花としては無難であつて多数の開花を用うることはけばけばしい。

東洋では富貴を以て任ずる牡丹が、西洋の花言葉では芍薬同様「羞恥」の意味を持つとされる。若い人にプレゼントする時は一度頸をひねつてからがよかろう。

最後に牡丹に関係ある俳句、短歌を二、三あげてこの稿を了らせていただく。

閻王の口や牡丹を吐かんとす　蕪村

寂として客の絶間のぼたんかな　〃

ちりて後おもかげに立つぼたんかな　〃

門へ来し花屋に見せる牡丹かな　太祇

瓶の中に紅き牡丹の花一輪
妻がおごりの何ぞうれしき　千樫

牡丹花は咲き定りて静かなり
花の占めたる位置のたのしさ　利玄

（北大農学部園芸学教室・助教授）

牡丹苗販賣

（芍薬砧接木苗）

昨年秋及び本春、右牡丹苗を取扱い販売致しましたところ、各株共一～二花時には三花位の見事な花をつけ植付初年目から皆様に大変喜こばれました本年秋も優良苗を販売いたします。（各色別）品種名価格等は九月号に掲載発表いたします。何卒御用命下さい。